

序

奈良国立文化財研究所史料第25冊として、『平城宮出土墨書土器集成』Iを世におくることになった。

古代以降歴史時代の官衙，寺院，集落その他の諸遺跡から土器に墨書したものが出土する。これらは古文書にみられない使用時のなまの文字資料として貴重な意味を持つ点では木簡におとらない学術的価値を持っている。しかも木簡に比べ、より悪い条件の遺跡でも残る可能性を持ち、木簡出土遺跡の何百倍かの遺跡から検出されるところに特色がある。一方、墨書土器は文書の意味で書かれたものというよりは、使用時の判別用の記号的なものか習書・落書風のものが多く、普遍性は高いが、内容を正確に断定できるものが少ないという難点を持っている。

平城宮出土墨書土器の研究は昭和3年、当時奈良県技師をしておられた岸熊吉氏にはじまる。平城宮東大溝出土土器に「内掃」の墨書銘のあることから、この付近に宮内省の位置したことを考定されたもので、近年の発掘でこの付近からさらにこの説を補う資料の増えたことは本集でも御覧いただけるものとする。

平城宮跡の本格的発掘調査をはじめた昭和34年以来、四半世紀にわたる発掘で出土した土器類は土師器・須恵器・施釉陶器その他数百万片を数えるが、宮内で約2000点、その他の平城京城でも700点の墨書土器を検出している。今回、このうち1070点をえらび、出土遺跡の説明、釈文と、器形のわかるものの実測図を添えて公表することとした。この中にはすでに発掘調査報告に発表したものも重複しているが、土器その他の遺物の調査が発掘の進行に追いつけない現状から、本書に載せた資料のほとんどは報告書の完成していない地区の出土資料であり、これによって平城宮出土墨書土器の大要を知っていただけるようになったと考えている。とはいえ現在までに検出した墨書土器の半数しか収録できていないので、今後も引続いて続巻を出版してゆく予定である。平城宮研究の新たな史料として『平城宮木簡』とともに御活用いただき、この研究に今後とも御理解と御鞭撻を願うものである。

昭和58年3月

奈良国立文化財研究所長

坪井清足